

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	小山信彌教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Nobuya Koyama
作成者（著者）	渡邊, 善則
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.07
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(4). p.189 189.
資料種別	学術雑誌論文
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.189
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD00119990

小山信彌教授送別の辞

渡邊 善則

東邦大学医学部外科学講座心臓血管外科学分野（大森）教授

小山信彌教授は、昭和47年に東邦大学医学部を卒業され、東邦大学医学部附属大森病院内科学第2講座で研修医として過ごした後、故亀谷壽彦教授の主宰された東邦大学医学部外科学第1講座に入局されました。4年間の外科研修終了後小松 壽先生率いる心臓血管外科グループに所属されることとなりましたが、心臓血管外科の研鑽を積む決意を胸に、昭和53年8月より1年半、順天堂大学胸部外科故鈴木章夫教授の下で心臓外科の基礎を学ばれました。昭和55年に帰局され、発展途上であった心臓血管外科を小松壽教授の下、少人数で苦勞されたようです。

私にとって印象的であった小山先生との出会いは、昭和59年に京都で開催された第84回日本外科学会総会です。冠動脈バイパス術の報告をされましたが、会場から“70歳以上の高齢者に冠動脈バイパス術を行うか”との質問を受けられました。当時65歳以上に対しての適応が議論されていましたが、70歳以上に対しては否定的な時代でした。外科最大の学会で、しかも口演の場で、さてどのように返されるのか興味深くもあり、また同門であるが故に、私も緊張した面持ちで会場にいましたが、“年齢は全く関係ありません”と一言語られて壇上から去られました。当時研修医の私には、とにかく堂々とした姿で、自分も爽快な気分になったことを覚えています。また当時の循環器病棟であった2号館5階東病棟は、第1外科の当直で回診に廻っても心臓外科医以外全く相手にされず、黎明期の心臓外科の術後病棟ではすべてのコールが小山先生に直結していて、学会活動や臨床活動で想像を絶するほどお忙しい日々を送られていたことでしょう。

平成3年に佐倉病院の開院時、心臓外科の立ち上げメンバーとして助教授の小山先生を筆頭に、私と鹿野純生先生がお供することとなりました。万全の準備をして佐倉病院の開院を迎えましたが、心臓手術は1年間実施を許可され

ず、自然豊かな千葉で、早くも人生の洗濯をしているようでした。いざ手術を開始してからは、正に寝食を共にする生活が始まりましたが、どんな状況においても小山先生のスタンスは変わらず、毎年必ず米国胸部外科学会に参加し、新たな知見を積極的に導入する姿勢をお持ちでした。佐倉病院では常温体外循環や逆行性心筋保護法を導入し、私どもに多くの発表や論文執筆の機会を与えて頂きました。

平成6年に大森病院に戻られ、翌年2月に胸部心臓血管外科学講座の教授に昇任されて、第8回日本自己血輸血学会を主催されました。その後も多くの学会を主催し、平成25年には本邦最大の学会である第43回日本心臓血管外科学会学術総会を主催され、私は事務局長として貴重な経験を積ませて頂きました。

平成9年には大森病院副院長となり、臨床・研究に加え病院経営にまで仕事の幅を広げられ、平成12年には大森病院院長となりました。今にして思えば、この時が小山先生の大転換点であったと言えます。その後の小山先生の活躍の場は、一心臓外科医からより高い次元で医療を見据える立場となり、大森病院では電子カルテの導入、3号館の設立、日本医療機能評価機構の病院機能評価の認定、学会においては日本胸部外科学会理事、日本心臓血管外科学会理事をはじめ外科系関連学会の評議員、各種委員を務められ、公的活動としましても文部科学省、厚生労働省をはじめ、私立医科大学協会、全国医学部長病院長会議、日本医師会等においてさまざまな要職に就かれており、本学の定年をお迎えになった後も、東邦大学名誉教授そして特任教授としてご活躍されています。

体力に自信のある心臓外科医とは言え、お体をご自愛頂き、東邦大学のため、今後も大所高所からのご指導を宜しくお願い致します。